

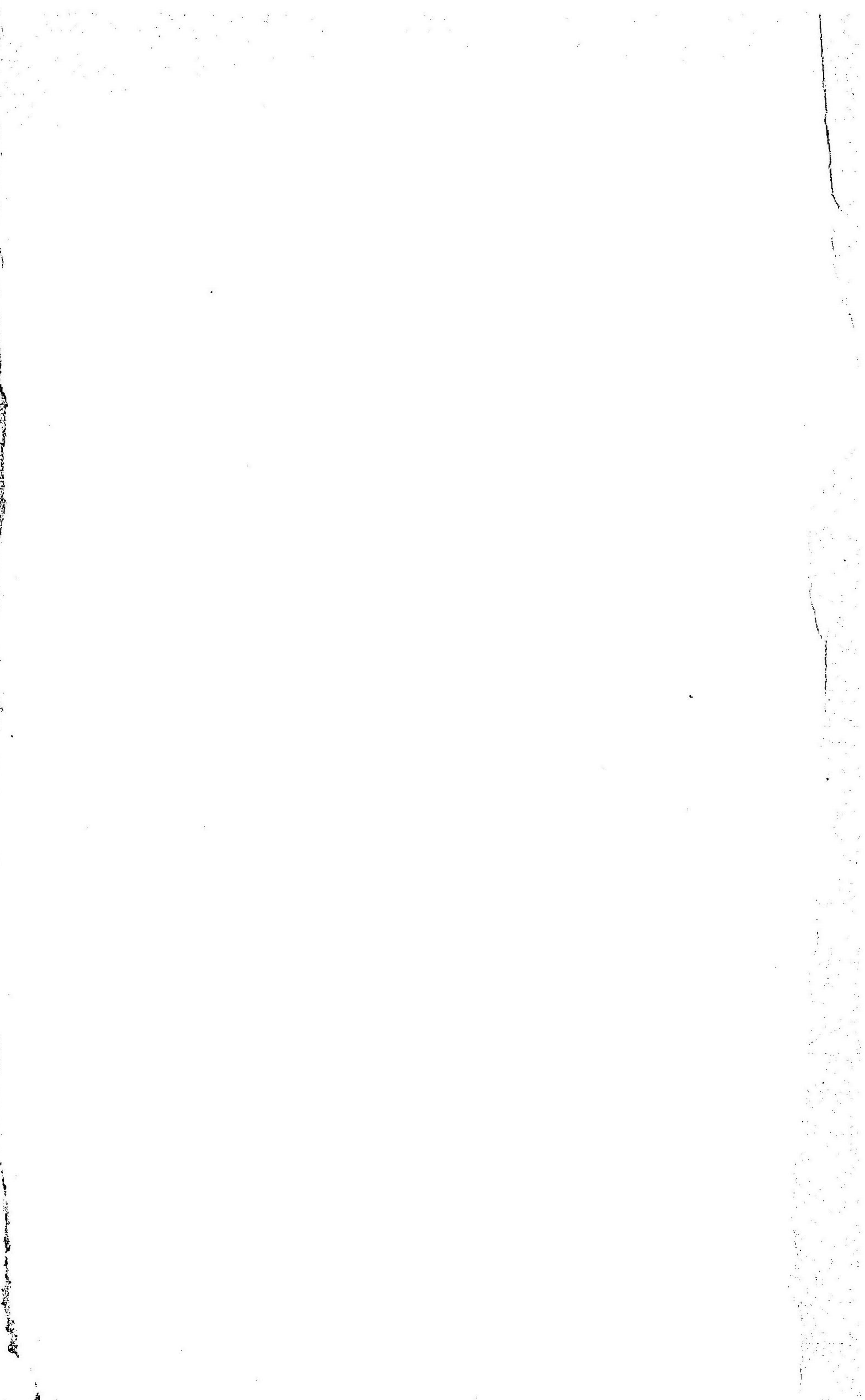
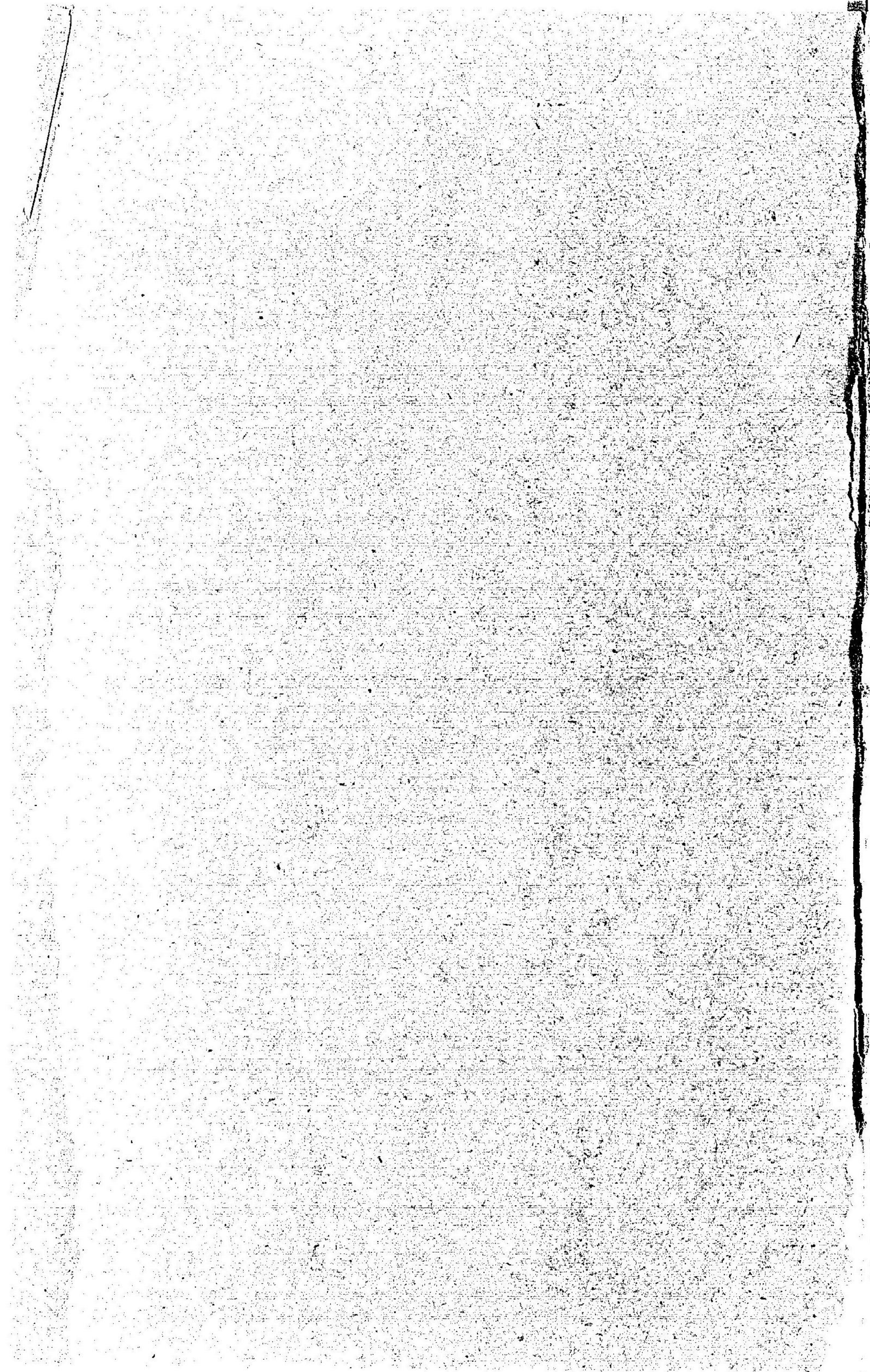
工1311-58

811.1
0812a

大島正健著

翻切要略

株式會社成成社藏版



翻切要略

811.10812h

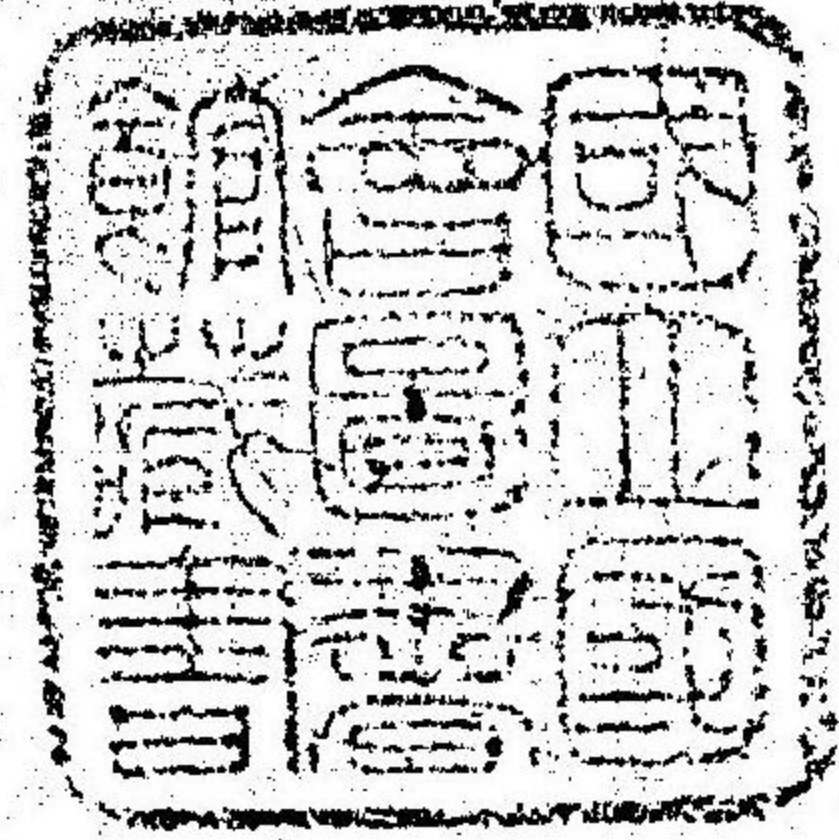
自序

韻書字書大抵反切を附して音韻を説明す。之を和譯せる者亦概ね然りとす。而して古今の反切を検するに、兩者相符合せざる所多く、音韻の響に自ら變化を生じ、反切の妙用は、後世の人其秘訣を窺ふこと能はざるに至れり。本邦の人五十音圖を按して、字音の反切を試むること、既に久しき習慣と爲り居れど、此法素より正音を得べき道に非ず。

此篇の目的は、羅馬字を用ゐて、反切を説明し、古人の由り來りし、音韻調和の法則を原ねんとするにあり。後世の學者反切の解釋に苦心せし者多く、司馬光が切韻指掌、劉鑑が切韻指南の如きは、共に詳細なる韻圖に由りて説明を試み、其門法も亦多端なり。就中切韻指南は其類別最も細密なれど、門法徒らに繁多にして、却

自序

一



225563

て入り難く、學ぶに便ならず。本邦亦十二門法の説明に力を盡せる學者多かりしが、その貢獻する所、その勞苦に伴はず。今日より之を觀れば、攻學の方法實に遠くして、却て迂に近きに似たり。十二門法に就きて、此篇に記する所は、その如何なる者なるか、只之を紹介せしに過ぎず。讀者之に對して特に考究の勞を費す要なかるべし。近世に至りては、張畊が切字肆考、反切を説くこと精細にして、其考證參考と爲すべきこと多し。

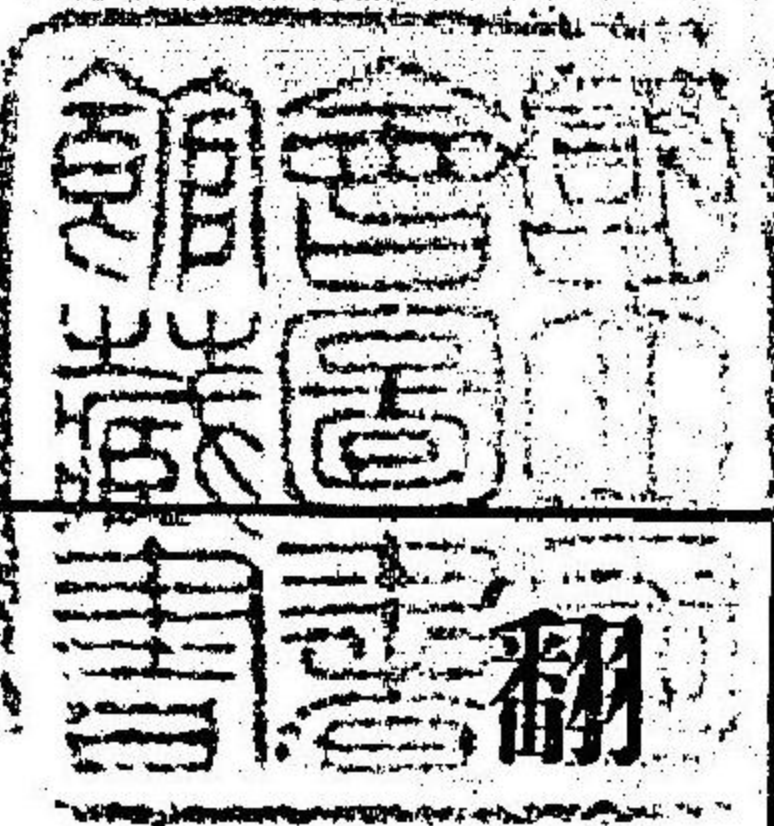
反切を論じて、一に之を音和法に歸せしめ、外に憑音憑韻の二門を附加したるは、新案なるべしと雖も、是唯私見として提出せるに過ぎず。羅馬字を用ゐたる説明法に至りても、未だ盡さざる所多かるべしと信じ、今之を學者の參考に供して、其教示を待つ。

二千五百七十二年紀元節拜賀の後之を書す。 著書 大島 正健

翻切要略目錄

五十音圖反切の不合理。	一頁
漢字音注。	三頁
脣弄反切法。	四頁
七音三十六字母及び助紐表。	七頁
反切の定義。	九頁
諸本反切門法。	十頁
十二門法の解。	十一頁
古音今音の差異。	二十五頁
反切の起原。	二十六頁
廣韻の反切と韻鏡の等位。	二十八頁
音和。	三十三頁

類隔	三十五頁
憑音憑韻	三十七頁
音和、憑音、憑韻の比較	三十九頁
羅馬字記法注意十項	四十三頁
反切の開合と假名遣	四十七頁
反切不同の開合	五十一頁
音字表	五十五頁
韻字表	五十九頁



切要略

大島正健著

本邦の學者、五十音圖に由りて、文字の音韻を正す、反切法を用ゐ來れり。この反切法は、横段にて母韻を尋ね、縦列にて父音を探り、而して父母兩音を結合せしめて、子音を求むる法なり。和學者の國字を反切すること、笑ふに堪へたること多けれど、之を漢字に施すに至りては、大根本異なるが故、正音を得ること能はざるは、固より言ふまでもなし。彼に我の如き五十音圖あることなし。故に我反切法に、由りて得たる音は、只單に漢字の和音と云ふに過ぎざるのみ。

伐木丁々の丁は竹耕切なり。竹耕は和音チクカウなり。カウの

カを取りて阿段に坐を定め、チクのチに由り多行を溯りて、カと同段に至ればタを得、之をカウのウと結べばタウと爲る。當は都郎切なり。都郎はトラウなり。ラウのラを取りて、阿段に坐を定め、トの音に由り、多行を溯りて、ラと同段に至ればタを得、之をラウのウと結べば、是又タウと爲る。竹耕切も都郎切も、其歸納異なる所なし。支那音の丁は *tang* 又 *chang*、當は *tang* と爲りて、拗直の別あるに協はず。丁音争とあるに至りては、和音にては尙更解すること能はざるべし。争は *tang* にして、*chang* と相近し。

珊は蘇干切にして山は所間切なり。何れも我反切にてはサヌの音と爲れど、干と間と韻の別は姑く措き、蘇と所とはソとシヨと直拗の別あり。諾は奴各切にして、諾は女白切なり。何れも我反切にては、ダクの音と爲れど、各と白と韻の別は姑く措き、

奴と女とはドとヂヨと直拗の別あり。以て我と彼と、反切の歸音の同じからざるを察すべし。

阿は烏何切なり。烏を和行のヲと爲せば、阿はワに歸して、本音のアに協はず。

烏は哀都切なり。哀は阿行音なれば、烏はオに歸して、本音のウに協はず。

總じて五十音圖に由る反切は、漢字の音を判ずる標準と爲し難しと知るべし。

昔し支那にては、文字に注し、或は一字にて共に音義を表はし、或は只音のみを表はし、或は母韻のみを取りて、義を添へて表はしたる者あり。父は甫なり、紀は基なりといふが如きは、第一の例、茶音浮、樂讀んで洛の如しといふが如きは、第二の例、吉は實なり、印は信なりといふが如きは、第三の例なり。諧聲字に由れば、枰裕は

第一の例、空園は第二の例、灑耗は第三の例なり。第三の類にて、單に母韻のみを表はす者多し、繆答の如し。かゝる場合には、寥合は音符と名づけずして韻符と唱ふべし。

後世反切法の廣く行はるゝに至りてより、音を解すること、主として之に由り、往々樂、歷各切、音洛の如く、反切と音注とを併べ用ゐたることあり。反切法の起原は遠しと雖も、其使用の流行は、綴字法に由り、父字と母字とを以て音韻を分つ、悉曇の呼法の力を借りたることも、蓋し多きに因るなるべし。其法漢末より次第に行はれ、魏の孫炎が爾雅音義、李登が聲類に、共に之を用ゐたりと云ふ。反切法は本來簡單なる者にして、後人の韻圖に據りて、種々の別を設くるが如き、煩鎖なる者に非ざりしこと明かなり。

磨光韻鏡の著者文雄上人は翻切伐柯篇に於いて、之を説くこと詳かなり。其書に曰く、

反切捷徑ノ要訣トハ其反切スル所ノ父字母字ノ音ヲ正シクシテ助紐ヲ加ヘ沈吟シテ是ヲ呼ベバ迺チ正音ヲ得ルナリ俗ニ唐人反ト稱スル者是ナリ

又唇弄ニテ反切スルヲ三折一律トモ云ヒ張麟之ガ韻鏡序例ニ見エタリ

遂知每翻一字用切母及助紐歸納凡三折總歸一律

其唐人反ノ訣トハ姑ク孚袁ノ切反ノ字ノ如キ孚ヒヘ反ノ音トナル千結ノ切ナレバ千シセ切ノ音トナルナリ其ヒンヘンシンセナドノ類ヲ助紐ト云ヒヒンヘンは芬番ノ字シンセは親千ノ字ナリ唯音ヲ取り用フルノミニテ字ニ拘ハルコトナシ日本ニテハ國字ニテ濟ムコトナリ

右の如く國字假名を用ゐたるに由り、要領を得ざることあり。之を羅馬字に改むれば、下の如くなるべし。孚(Fu)―芬(Fin)―番(Fan)と

三折して輕唇次清音fの一律に歸し、之を更に袁(wyən)の韻wyənと合して翻のwyənに歸納す。此略音はwənなるべけれど、fは合口のwyənと結ぶときは、wənと爲る癖あり。又fの後に來れば、wもyも共に落つるを常とす。正式の記法に従へば、字はwyən助紐の字芬はwyin、番はwyənなり。歸字は翻にして反に非ず。反はwyən、其略はwənにして、次清の出氣音にあらず。又千(sən)親(sin)一千(sən)に三折してsənの一律に歸し、之と結(keb)の韻seと合し、切のsənに歸納す。助紐にはsinの如く響く字を用ゐるを常とす。何故に助紐を用ゐる必要ありたるかと考ふるに、漢字は羅馬字の如き、綴字にあらざるが故、直ちに音韻を分ち得る便なく、一字のみにては、音を探ること十分定かならず、因りて尙他の二字を借り、唇弄即ち口拍子にて前例のf ts'の如き音を確かむるなり。左に七音三十六字母及び之に對する助紐の文字を記し、其下に

羅馬字を附して表を示す。

七音三十六字											
唇音				舌音				牙音			
清	濁	次清	清	清	濁	次清	清	清	濁	次清	清
幫	滂	並	明	端	透	定	泥	見	溪	羣	疑
p	p'	b	m	t	t'	d	n	k	k'	g	ng
賓	邊	頻	民	丁	汀	延	寧	經	輕	勤	銀
篇	蟻	蠟	眠	顛	天	田	年	堅	牽	虔	言
非	敷	奉	微	知	徹	澄	孃				
f	f'	v	in	ī	f'	ā	n				
分	芬	汾	文	珍	禪	陳	紉				
蕃	翻	煩	構	遼	延	塵	孃				

母 及 助 紐 表										
齒音舌		音 喉				音 齒				
清	濁	清	濁	清	清	濁	清	濁	次清	清
日	來	喻	匣	曉	影	邪	心	從	清	精
j	l	y	i'	h	i	z	s	dz	ts'	ts
人	鄰	韻	磬	馨	般	錫	新	秦	親	精
然	連	緣	賢	沃	焉	涎	仙	前	千	煎
						禪	審	牀	穿	照
						z	s	dz	ts'	ts
						辰	身	禿	眞	眞
						禪	羶	潺	燁	龜

助紐の力を借り、音を呼び起して、下の韻字に迫り、次に韻字は韻注韻符を用ゐる例に於いて見るが如く、母韻を主位に立つる傾向を生じ、遂に己が音を捨て、前の音と結び、而して求むる所の

歸音を作るに至るなり。

反切も翻切も、其義異なる所なし。翻切に用ゐる二字は、上は韻を捨て、音を取り、之を歸字の音に用ゐ、下は音を捨て、韻を取り、之を歸字の韻に用ゐるなり。上を父字と呼び、下を母字と名づく、又切韻の名稱を用ゐるより、上を切字とも唱ふ、されば之に對して下は韻字となるべし。此書にては上を音字下を韻字と稱す。反切の定義に異説あれど、次の如く考ふること穩當なるべし。音の助紐を借り、展轉して一律に歸する、之を翻といふ。上の字の音、下の字の音と相摩し、下の方を侵して、新音に變へしむる、之を切といふ。かくして上の音下の韻と合して、歸字の聲となるなり。翻切の翻はカヘルの義、切はツヅムルの義なり。今日の常用語にては翻も切も同意義にて使用せらる。古へ某某反と唱へしを、後某某切と改むるに至りしは、反の字を避けたるに由ると云ふ。

時代の進行くに随ひ、音韻の變化著く現はれ來り、之に對する自然の結果として、耳に訴へずして、目に訴ふる法を取りて、反切門法を設くるに至り、而して是も亦次第に多端となり、**玉篇指南**には音和、互用、類隔、往還の四門を立て、**韻鑑歸字篇**には初疊音和、憑切、正音和、二位一音和、異位音和、上聲去音分別の六例を出だし、**切韻指掌**には音和、類隔、雙聲、疊韻、憑切、憑韻、寄聲、寄韻、廣通、偏狹、往來の十一例と爲し、**切韻指南**には音和、類隔、窠切、輕重交互、振救、正音憑切、精照互用、寄韻憑切、喻下憑切、日寄憑切、通廣偏狹、内外、麻韻不定之切、前三後一、寄聲音和、就形門、窠立音和、開合、通廣、偏狹の二十門を設く。本邦の學者は雙聲、疊韻、音和、類隔、互用、往來、廣通、偏狹、憑切、憑韻、寄聲、寄韻の十二門を定め、**磨光韻鏡**は之を音和、雙聲、疊韻、廣通、偏狹、憑切、類隔、往還の八門に約す。

是より十二門法につき、説明を下すべし。音韻圖は切韻圖に由ら

ずして、韻鏡に由ることとせり。

第一、雙聲。

音字韻字共に同音同母に屬し、歸字は韻字と同一なるを、雙聲とす。

靈 *l(eng)* 歷 *(l)ek* 切 歷 *lek*

音字韻字共に第三十五轉半舌音來母に屬す。

和 *i(wai)* 會 *(i)wai* 切 會 *i'wai*

和は第二十八轉喉音匣母、會は第十六轉同音同母に屬す。

第二、疊韻。

音字韻字共に同韻同等に屬し、歸字は音字と同一なるを疊韻とす。

切 *ts'et* 結 *(k)et* 切 切 *ts'et*

音字韻字共に第二十五轉屑韻四等に屬す。

聽 t(eng) 徑 (k)eng 切 聽 t'eng

第三、音和。

音和とは歸字の音字と同音同母にして、韻字と同韻同等なる者をいふ。

德 t(ok) 紅 (i)ong 切 東 t'ong

德は第一轉舌頭音端母、紅は同轉東韻一等、東は同音同母同韻同等に屬す。音字德も亦一等に屬するを以て、音韻歸字共に同等なり。因りて之を四同音和と名づく。

五 n(ɔ) 韃 (k)ɛn 切 言 ngen

五は第十五轉牙音疑母、韃は第二十一轉元韻三等、言は同音同母同韻同等に屬す。音字五は一等に屬するを以て、韃元と等を同じうせず、因りて之を三同音和と名づく。

指南の寄正音和も、内外の一部も、此門に入るべし。

衝 ts(ɔng) 山 (s)ɛn 切 禪 ts'an

衝は第二轉正齒音穿母三等、山は二等、禪は正齒音穿母山韻二等に屬す。

右は寄正音和なり。音字正齒音三等にして、韻字二等にあるとき、歸字の韻字と同等に位する者をいふ。

古 k(ɔ) 雙 (s)ɛng 切 江 kyang

古は第十二轉牙音見母一等、雙は正齒音審母江韻二等、江は牙音見母二等韻なり。

右は内外なり。韻字正齒音二等にあるとき、齒音を除き、音字の等の何れにあるに拘はらず、歸字の内轉にては三等外轉にては二等に位するものをいふ。

第四、類隔。

類隔とは音和と同様にして、只異なる所は歸字の音字と同音に屬すれど、輕重同じからざる者をいふ。

都 t(ɔ) 江 (k)ɛng 切 椿 t'ing

都は第十二轉舌頭音端母、江は第三轉二等韻、椿は舌上音知母、江韻二等に屬し、音字と歸字と、舌音輕重同じからず。

則 *ts(ɔ)k* 齧 *(k)ɣəm* 切 斬 *tsʰim*

則是第四十二轉齒頭音精母、齧は第三十九轉、齧韻二等、斬は正齒音照母、齧韻二等に屬し、音字と歸字と、齒音輕重同じからず。右は指南の精照互用なり。音字歸字と、一等二等、其等を異にし、齒頭音と正齒音と轉換する者をいふ。

女 *ny(ɔ)* 星 *(s)ɛŋ* 切 寧 *nɛŋ*

女は第十一轉舌上音孃母、星は第三十五轉青韻四等、寧は舌頭音泥母、青韻四等に屬し、音字と歸字と、舌音輕重同じからず。

右は指南の麻韻舌音不定之切なり。音字舌上音三等にして、韻字四等にあるとき、三等空位にして歸字四等にする者

第五、互用。

類隔と互用とは、其性質に於いて異なる所なし、只互用は唇音

三等輕重轉換の場合にいふ別あるのみ。

方 *fy(əŋ)* 免 *(m)ɣən* 切 辨 *pyən*

方は第三十一轉、輕唇音非母、免は第二十三轉、銑韻三等、辨は重唇音幫母、銑韻三等に屬し、音字と歸字と、唇音輕重同じからず。

武 *my(w)* 兵 *(p)ɣɛŋ* 切 明 *myɛŋ*

武は第十二轉、輕唇音微母、兵は第三十三轉、清韻三等、明は重唇音清韻三等に屬し、音字と歸字と、唇音輕重同じからず。

右は指南の輕重交互なり。指掌は互用の門を立てずして、之を類隔の中に入る。

第六、往來。

往來とは異なる音に屬する字母の相通ずる者をいふ。往來は往還とも稱す。

奴 *n(ɔ)* 亥 *(h)ɣi* 切 疴 *hɣi*

奴は第十二轉、舌頭音泥母、亥は第十三轉海韻一等、疋は半齒音日母海韻三等に屬し、泥母と日母との往來なり。

疑 *ngy(i)* 求 *(g)yiu* 切 尤 *yyiu*

疑は第八轉、牙音疑母、求は第三十七轉尤韻三等、尤は喉音喻母三等韻にして、疑母と喻母との往來なり。

是 *z(i)* 力 *(l)yok* 切 食 *dzok*

是は第四轉、細正齒音禪母、力は第四十二轉、職韻三等、食は正齒音牀母職韻三等に屬し、禪母と牀母との往來なり。

胡 *yo* 孔 *(k)ong* 切 噴 *hong*

胡は第十二轉、喉音匣母、孔は第一轉、董韻一等、噴は喉音曉母董韻一等に屬し、匣母と曉母との往來なり。

第七、廣通。

正齒音三等韻の字の韻字と爲るとき、歸字の四等に下るを廣

通といふ、此類廣く三等より四等に通ずるの謂なり。指掌に支脂眞諄蕭仙祭清青は、正齒音第三を韻と爲し、唇牙口の下推して四を尋ねよとあり。指南にては廣通を通廣といふ。

巨 *gyo* 支 *(z)i* 切 祇 *gi*

巨は第十一轉、牙音群母、支は正齒音支韻三等、祇は牙音群母支韻四等に屬し、歸字は韻字と等を異にして四等の下る。

第八、偏狹。

齒頭音若しくは喉音影喻を音とせる四等韻の字の韻字と爲るとき、歸字の三等に上るを偏狹といふ。此類狹く四等より三等に縮まるの謂なり。指掌に鍾陽魚虞蒸麻尤侵鹽は偏狹に收め、影喻齒頭の四を韻と爲し、三上に於いて推して求むとあり。指南にては偏狹を伺狹といふ。

去 *kyo* 陽 *(y)ang* 切 羌 *kyang*

去は第十一轉牙音溪母、陽は喉音喻母、四等韻、羌は牙音溪母陽韻三等に屬し、歸字は韻字と等を異にして、四等より三等に上る。

居 ky(4) 悚 (s)ong 切 拱 kyong

居は第十一轉牙音見母、悚は第二轉細齒頭音腫韻四等、拱は牙音見母腫韻三等にして、歸字と韻字と等を異にし、四等より三等に上る。

第九、憑切。

憑切とは、歸字の音字と同音にして、韻字と同轉の韻に屬し、其等を變へて、音字の等に移るものをいふ。指掌に述ぶる所の憑切は、之と同じからず。曰く同韻にして兩切に分るゝ者は、之を憑切と謂ふと、而して乘人切神、承眞切辰を以て、其例とせり。憑切は切に依る、即ち音に依る義と見ること、適當の解釋なるべし。

直 d(ok) 猷 (y)in 切 儔 diu

舌上音澄母三等

尤韻四等

舌上音澄母尤韻三等

右は指南の窠切なり。音字舌上音三等にして、韻字齒音若しくは喉音四等にあるとき、歸字の音字に従ふものをいふ。

思 (s)i 肇 (d)éu 切 小 séu

齒頭音心母四等

小韻三等

齒頭音心母四等

右は指南の振救なり。音字齒頭音にして、韻字三等にあるとき、歸字齒頭音四等に位するものをいふ。

山 (s)án 幽 (y)in 切 摻 sin

正齒音神母二等

四等

正齒音神母幽韻四等。

右は指南の正音憑切なり。音字正齒音二等にして、韻字他等の何れにあるに拘はらず、歸字の音字に従ふものをいふ。

成 (t)eng 攜 (i)wéi 切 移 z(w)éi

正齒音禪母三等

齊韻四等

正齒音禪母齊韻三等。

右は指南の寄韻憑切なり。音字正齒音三等にして、韻字一等四等にあるとき、歸字の音字に従ふものをいふ。

彼 *py(i)*

唇音群母三等

側 *(ts)ok*

職韻正齒音二等

切 逼 *pyok*

唇音群母職韻三等

右は指南の内外なり。

余 *y(o)*

喉音喻母四等

朝 *(t)éu*

特韻三等

切 遙 *yéu*

喉音喻母宵韻四等

右は指南の喻下憑切なり。

喻母の下、歸字の音字の等に從ひて、三等、四等に上下する者なむ。

如 *j(o)*

半齒音三等

延 *(y)én*

仙韻四等

切 然 *jén*

半齒音仙韻三等

右は指南の日寄憑切なり。

音字半齒音三等にして、韻字は他等に位するも、歸字の音字の等に從ふ者なむ。

指南の前三後一も此門に入るべし。

音字輕唇音三等、韻字一等にして、歸字の音字に從ふを前三といひ、音字重唇音一等韻字三等にして、歸字の音字に從ふを後一といふ。

縛 *vy(ák)*

唇音奉母三等

嘔 *(m)ou*

喉韻一等

切 浮 *vyiu* (前二)

唇音奉母尤韻三等

莫 *m(ák)*

唇音明母一等

六 *(l) yok*

燭韻三等

切 木 *mok* (後一)

唇音明母燭韻一等

力 *ly(ok)*

半舌音三等

小 *(s)éu*

舌頭音四等

切 繚 *lyéu* (廣)

半舌音小韻三等

力 *ly(ok)*

半舌音三等

遂 *(s)wi*

舌頭音至韻四等

切 類 *lywi* (通)

半舌音至韻三等

良 *ly(áng)*

半舌音三等

弊 *(ts)áng*

喉音喻母養韻四等

切 兩 *lyáng* (伺)

半舌音養韻三等

力 *ly(ok)*

半舌音三等

鹽 *(y)én*

喉音喻母四等

切 廉 *lyén* (狹)

半舌音鹽韻三等

右四例は指南の通廣伺狹なり。

音字半舌音三等にして、韻字舌頭音若しくは喉音職每四等にあるとき、歸字の音字に從ふも、

なむ。

其 *gy(i)*

牙音群母三等

徒 *(d)o*

模韻一等

切 渠 *gyo*

牙音群母虞韻三等

右は指南の就形門なり。音字重唇牙喉三等にして韻字一等にあるとき、歸字の音字に從ふものをいふ。

莫 m(ik) 者 (s)e 切 セ me

唇音明母一等

馬韻三等

唇音明母馬韻四等

右は指南の剏立音和なり。音字重唇牙喉除母を除くにして韻字三等にあるとき、三等空位の場合には四等字を以て補ふ者をいふ。之を憑切の中に置くは、一等四等同字母を用ゐるに由るなり。

以上指南の類別に從つて例を擧げ來りしが皆均しく憑切なれば、此細目を分つ必要なかるべし。指南は只名を附して各種特別の場合を示したるものなれば、煩はしくして却て不便多く、一々説明を下すは、徒勞なるが如し。

力 ly(ok) 延 (y)en 切 連 lyen

半舌音三等

仙韻四等

半舌音仙韻三等

右は分韻憑切の例なり。延は第二十一轉仙韻四等、連は第二十三轉仙韻三等に位する者、韻字歸字に用ゐたる憑切を上如く名づく。

子 (s)i 能 (k)wya 切 佳 tswi

齒音精母四等

戈韻三等

齒音精母戈韻一等

才 dz(i) 捶 (ts)ywi 切 寔 dzwi

齒音從母一等

紙韻三等

齒音從母紙韻四等

右の二例の如く、歸字と音韻の兩字の何れとも、等の異なる者を傍憑切と名づく。前例は精母の下、三等四等空位にして歸字を一等に取り、後例は從母の下、一等三等空位にして歸字を四等に取り。

第十、憑韻。

憑韻とは歸字は音字と同音同母、韻字と同等なれど、韻は他轉の同韻、若しくは同用の韻に憑る者をいふ。指掌に説く所の憑韻は、之と同じからず、曰く同音にして兩韻に分るゝ者は、之を憑韻と謂ふと、而して巨宜切其、巨沂切祈を以て其例とせり。憑韻は宜しく韻に依ると解すべし。

雨 ywy(u) 遍 (p)yok 切 域 ywyok

喉音除母

第四十二轉職韻三等

第四十三轉職韻三等

右は合轉の韻字を以て、開轉の同韻を補へる例にて、之を一韻頭憑韻と名づく。

時 (ㄷ)

至 (ㄷ)

切 侍 (ㄷ)

齒音禪母

第六轉至韻三等

第八轉志韻三等

右は相通ずる、同用の韻字を以て、他を補へる例にて、之を同用憑韻と名づく。

第十一、寄聲。

韻圖空位に當るとき、字を定めて之を補ふを寄聲といふ。指掌に字無ければ、則ち窠に點じて以て之を足す、之を寄聲と謂ふとあり、即ち是なり。此門別に説明の要なかるべし。

第十二、寄韻。

指掌に韻闕くれば、則ち隣を引いて以て之を寓するを寄韻と謂ふとあり。此定義に従へば、寄韻と憑韻と異なる所なきが如

し。磨光は兩者全く同一なりと説きて憑韻の門を設けず。然れども舊説に従へば、同用以外の通韻を借るを寄韻と稱するに似たり。

鍊 f(ɕ)

柱 (d)ju

切 丑 t'jin

舌音透母

磨韻三等

有韻三等

右は有の韻を磨の韻に通はせたるなり。有磨は同用の韻に非ざるが故、歸音は憑韻にはあらず。鍊柱の反切は舌音重輕の類隔なり。何れにしても正法を去ること遠して謂ふべし。

以上は反切十二門法と稱する、至つて古風なる學問の研究にして、其結果として贏ち得る所甚だ少し。一字を反切する毎に、一々韻圖を按ずるが如き不便ありては、反切の効用何かあらん。古音は今音を以て律すべからざるは論を俟たず、強ひて兩者の調和を企てんとせば、韻圖を作り、門法を立つる窮策を施すに至るな

り。古音は古音、今音は今音の反切に随ひて讀むべし、決して兩者を混同すべからず。玉篇、唐韻、廣韻、集韻の反切は簡單なれど、切韻指掌、切韻指南、韻會、正韻、字彙の類に至りては、次第に複雑と爲り來れり。我漢音吳音の如きは、唐宋時代の音とは一致する所ありと雖も、後世の反切とは、其音の協はざる者多し、試に磨光韻鏡に字彙を引いて出だしたる例を擧げて、之を示すべし。中の字、陟隆切音終、主の字、腫與切諸の上聲、乘の字、時征切音成、予の字、弋渚切を察して讀み行けば、反切は自然の音に歸すべきこと明かなりとす。

切字肆考に諸書を引いて、反切の起原を説くこと精細なり。而已の二聲を合して耳の一字、之乎の二聲を合して諸の一字、如是の二聲を合して爾の一字と爲せるが如きは、能く後世の反切法に

協へるものなり。春秋桓二十年公及宋公燕人盟于穀丘、左傳句讀の丘に作る、句讀の正切は穀なり。禮記、檀弓銘明旌也、明旌の正切は銘なり。爾雅、禘大祭也、大祭の正切は禘なり。釋名、鞞蔽膝也、所以蔽膝前也、蔽膝の正切は鞞なり。此外尙二聲を合して一聲と爲せる多數の證例を擧ぐ。孫炎が反切を作れりと云へるは、古くより行はれ來りし習慣を踏襲して、形式を調へたるものなるべし。反切は本來雙聲疊韻を用ゐたりと云ふ。東の字、德紅切は、東と德と雙聲にして、東と紅と疊韻なりと云ふは、後世門法にて説く所の義と同じからず。此解に従へば、音和正切は皆雙聲疊韻なり。この雙聲疊韻は語路の宜しきを好みたるものと見え、昔より用ゐ來られし例多し。詩の關雎中に見ゆる參差は雙聲にして、窈窕は疊韻なり。此用法六朝の頃盛に流行せしことあり。音字韻字の二聲を、雙聲疊韻に用ゐたるは、此語法に従ひたることなるべきが、歸

字の音字又韻字と同じきに至りては、反切の要あるを見ず。唐宋の頃には、等韻の名目未だ廣く世に行はれざりしと見え、唐韻は知ることを得ざれど、廣韻、集韻には其別なく、切韻指掌の原本にも、等位を記せざりしと云ふ。然るに韻鏡に早く已に之を載せしは、其書の緻密なる耳を以て、音韻を聽分くる、力ありし者に由りて、作られたるものなるべきことを知るに足るべし。廣韻と韻鏡と相近き者として比較するに廣韻の反切に用ゐたる文字の用法に、自ら法則ありしを觀る。韻鏡の各等の字に、反切を附して對照すれば、各等の字の反切の音字には、其等所屬の字を用ゐるを正則と爲すことを發見すべし。一等は概して之に協ふ。

博	P(ak)	毛	(m)au	切	褒	pau
德	t(ak)	紅	(i)ong	切	東	tong

五	ng(o)	可	(k)h	切	我	ng
蘇	s(o)	后	(i)ou	切	叟	sou
呼	h(o)	北	(p)ok	切	黑	hok

右は音字一等、韻字一等、歸字一等に位する例なり。

於	iy(o)	改	(k)ai	切	欵	iai
牛	ngy(iu)	昆	(k)won	切	暉	ngwon

右は音字三等、韻字一等、歸字一等に位する例なり。

偏	p(ɛn)	杯	(p)wai	切	胚	p'wai
息	s(ok)	郎	(l)ang	切	桑	sang

右は音字四等、韻字一等、歸字一等に位する例なり。

二等は最も例外多し。

所	s(o)	間	(k)yan	切	山	sin
客	k'y(ak)	庚	(k)yang	切	杭	k'yang

右は音字二等、韻字二等、歸字二等に位する例なり。

古 k(ɔ) 諧 (i)yai 切 皆 kyai

莫 m(ɔk) 更 (k)yang 切 孟 myang

右は音字一等、韻字二等、歸字二等に位する例なり。

直 d(ɔk) 教 (k)yau 切 棹 dāu

衣 iy(i) 嫁 (k)ya 切 亞 iya

右は音字三等、韻字二等、歸字二等に位する例なり。

側 ts(ɔk) 侍 z(i) 切 蓄 fsi

牀 dz(ang) 據 (k)yo 切 助 dzo

山 s(án) 矜 (k)yong 切 旡 song

右は音字二等、韻字三等、歸字二等に位する例なり。内轉の諸韻にて、齒音のみ二等に位することあり。其場合には三等字を以て韻字と爲し、音字には二等字を用ゐて調和せしむるを通則

とす。此類反切の語勢に、自然の法則ありと知るべし。

三等は法則極めて嚴格なり。然れども多少の例外無きに非ず。

力 ly(ɔk) 鍾 (ts)ong 切 龍 lyong

如 j(ɔ) 隣 (l)yin 切 人 jin

之 z(i) 若 (j)ak 切 灼 tsak

居 ky(ɔ) 吟 (ng)yim 切 金 kyim

央 iy(ang) 居 (k)yo 切 於 iyo

右は音字三等、韻字三等、歸字三等に位する例なり。

山 s(án) 員 (y)ywén 切 栓 swén

右は音字二等、韻字三等、歸字三等に位する例なり。

彼 py(i) 側 (ts)ok 切 逼 pyok

右は音字三等、韻字二等、歸字三等に位する例なり。

旨 ts(i) 夷 (y) 切 脂 z(i)

直 (d)ok 由 (y)iu 切 儻 (t)iu

右は音字三等、韻字四等、歸字三等に位する例なり。

予 (y)u 救 (k)iu 切 宥 (y)iu

右は音字四等、韻字三等、歸字三等に位する例なり。

四等は二等に次いで例外多し。

息 (s)ok 晋 (s)in 切 信 (s)in

彌 (m)u 笑 (s)eu 切 妙 (m)eu

右は音字四等、韻字四等、歸字四等に位する例なり。

他 (t)u 前 (dz)eu 切 天 (t)eu

五 (ng)u 聊 (l)eu 切 堯 (ng)eu

右は音字一等、韻字四等、歸字四等に位する例なり。

去 (k)u 盈 (y)eng 切 輕 (k)eng

力 (l)ok 幽 (i)iu 切 鏐 (i)iu

右は音字三等、韻字四等、歸字四等に位する例なり。

息 (s)ok 弓 (k)uung 切 嵩 (s)ung

以 (y)u 脂 (s)yi 切 姨 (y)u

右は音字四等、韻字三等、歸字四等に位する例なり。

一等と四等とは、音字は共通なれど、開發收閉の、開閉の聲間隔ありて、韻字は其轉換を許さざるものか、音字一等、韻字四等、歸字一等又音字四等、韻字一等、歸字四等に位するが如き例を見ず。一等と三等とも、關係少きが如し。稀に音字三等、韻字一等、歸字一等、或は其反對に位する者あるを見る。一等と二等とは音字一等、韻字二等、歸字一等、又音字二等、韻字一等、歸字二等の如き例に接したるを覺えず。音字二等、韻字一等、歸字一等の例は、有り得べしと信じ居れど、未だ見當らず。二等と四等とも關係あるを見ず。さて以上の諸例を通覽するに、音字、韻字、歸字、共に同等に屬する

者は、いはゆる四同音和にして、反切の正法に協ふ者なり。一等と四等と又二等と三等と、母字共通せる者は、音字の等異なることありといへども、是亦音和と稱することを得べし。指掌に同音同母同韻同等なるを音和と謂ふとありて、其意韻字と歸字と同韻同等なるべきを説けど、音字の等に於いては、深く與らざるに似たり。後の人四同の中、等の異なる者あるを、三同音和と唱ふれど、若し韻字と歸字とをして、等を異ならしむれば、忽ち音和法を破るに至るべし。故に韻字と歸字と同等なるべきことは、音和法として動かすべからず。強ひて三同音和の名義を附せんとせば、一四兩等、二三兩等の如き、字母の共通する場合を取るべし。一四兩等は直聲、二三兩等は拗聲なれば、其同類の間に、音字の轉換するは、大なる故障あることなし。細密に考査すれば、一四兩等、二三兩等、各同字母を用る居れど、全く同音なりとは見做し難し。一等字

の、四等韻の音字と爲るは、其例多けれど、反對に四等字の、一等韻の音字と爲るは、其例少し。又内轉齒音にて、二等字の、三等韻の音字と爲るとき、歸字の二等に上るは、既に示したるが如し。又二等三等同じく拗聲にして、唇音は三等にては、輕と爲ることあれど、二等にては、之を許さず。是皆母韻の強弱に伴ひて、之に接する音にも、聊か差異ありたるを知るべし。故に此篇にては、韻字歸字同韻同等、音字歸字同音同母にして、音字の他と等を同じうするを正音和、等を異にするを準音和と名づくべし。

音和に對して諸家類隔の門を設く。重唇(二等)牙喉の三音は、其響硬くして、拗韻に接すと雖も、能く其本音を保てど、舌齒の兩音は、其響軟かにして、拗韻に接するとき、崩れて其本音を失はんとする傾向を生じ、之に對して拗聲の別字母を作りたるが故、他に對して特殊の關係を起すに至れるなり。此拗聲字母を直聲字母に

改め、其下に拗聲を示す音標字を附すれば、類隔門を立つる要を見ざるに至るべし。都江切椿は博江切邦に對し、又則鹵切斬は古斬切鹵に對し、共に其形式に於いて異なる所無かるべし。

都 (to)	江 (k)yang	切 椿 (yang)yang
博 (p)ak	江 (k)yang	切 邦 (yang)
則 (ts)ok	鹵 (k)yan	切 斬 (ts)yan(tsam)
古 (ko)	斬 (ts)yan	鹵 (k)yan

唇音のみは、三等の拗韻に接するとき、字母を換ふべき要を生ず。三等韻の力弱き者に接しては、之に惹かれて、重唇音は輕唇音と爲るなり。指掌の補微切非は其例なり。

補 (p)o	微 (ei)yi	切 非 (fi)
--------	----------	----------

反對に、三等韻の力强き者に接するとき、輕唇音は重唇音と爲ることあり、方免切辨の如し。

方 (fy)ang	免 (m)yen	切 辨 (py)en
-----------	----------	------------

これいはゆる互用門なり。爰に反切の原理を考へ合はせ、反切門を總括して、音和、憑音、憑韻の三門に類別す。他に小異ある者は皆之に隸屬せしむべきものとす。

憑音とは、歸字の、音字と同音同母同等にして、韻字と同韻若しくは同用の韻に屬すれど、其等を異にする者をいふ。音字も切字も同義なれば、憑音は即ち憑切なり。前に出だせる息弓切嵩、直由切儻は其例なり。

憑韻とは、歸字の、韻字と同韻同等にして、音字と同音なれども、其等を異にして、直拗同じからざる者をいふ。この憑韻の定義は從來諸家の唱へ來りし者と同じからず。憑音の、音に依るが如く、憑韻は韻に依るの謂なり。前に出だせる古懷切乖、居盈切輕は其例

なり。

古懐切乖は、從來三同音和の例として引用せらるゝこと多けれど、是は音和の適例には非ず。二等は拗聲の格なれば、音字は拗聲なるを正法と爲し、舌齒の音は是がために輕音に變はれど、唇牙喉の音は麤にして強く、此等にては直音に轉ぜんとする傾向ありて、直聲の音字の雜り入ることあるなり。これ憑韻にして音和に非ず。此場合にて舌齒の音の、類隔と爲ることあるも、同じく憑韻なり。重唇牙喉の音の、拗聲に響く者は、舌齒の音と其性質を異にするが故、直拗共に同一の字母を用ゐて、輕重の別を立てず。半舌音も亦字母は同一なり。三等にては唇音は輕と爲ることあるは、前に陳べたるが如し。

指掌の補微切非は、強音の弱韻に惹かれて、重唇音より輕唇音に轉じ、丁呂切貯は、直音の拗韻に惹かれて、其音を轉じたるな

り。兩者共に三等の憑韻類隔なり。前に出だせる予救切宥は、三等憑韻一般の例なり。四等にては居盈切輕は、憑韻の例なり。方典切編は、拗韻より直韻に移るに伴ひ、唇音の輕を重に轉じたるなり。是亦憑韻類隔と見るべし。二等には牙音の下、最も憑韻多く、唇喉兩音に屬する者之に次ぐ。

左に普通廣韻に見當る所の、前に擧げたる反切の例を再記し、上に等位を列ねて、音和、憑音、憑韻の別を示すべし。

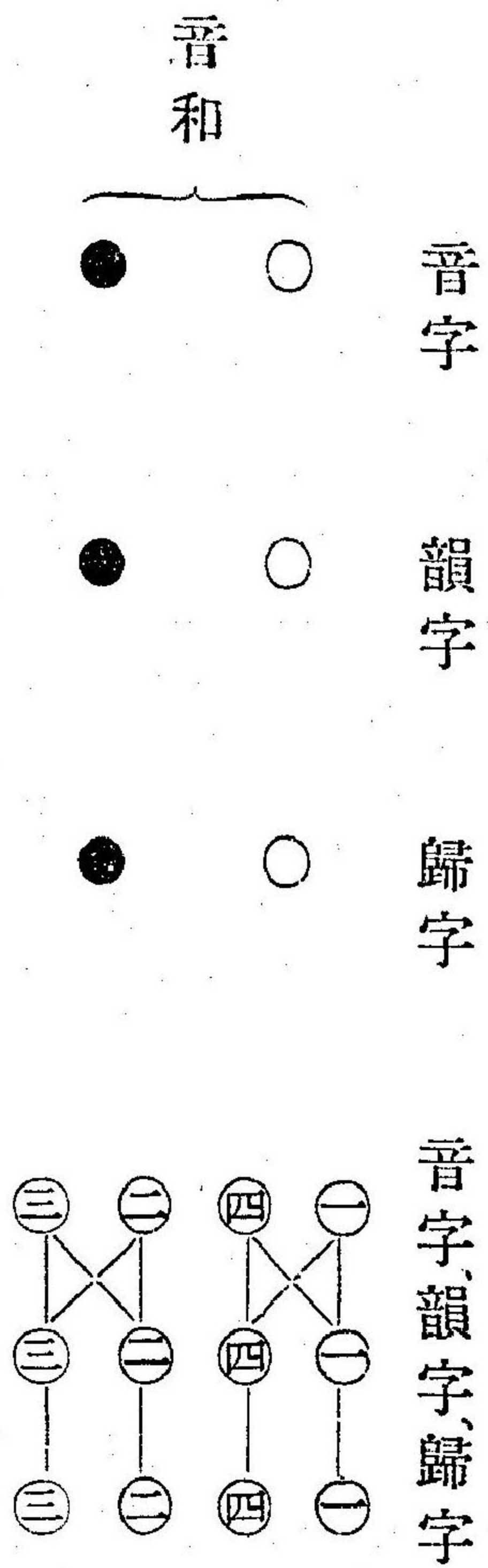
音字 韻字 歸字

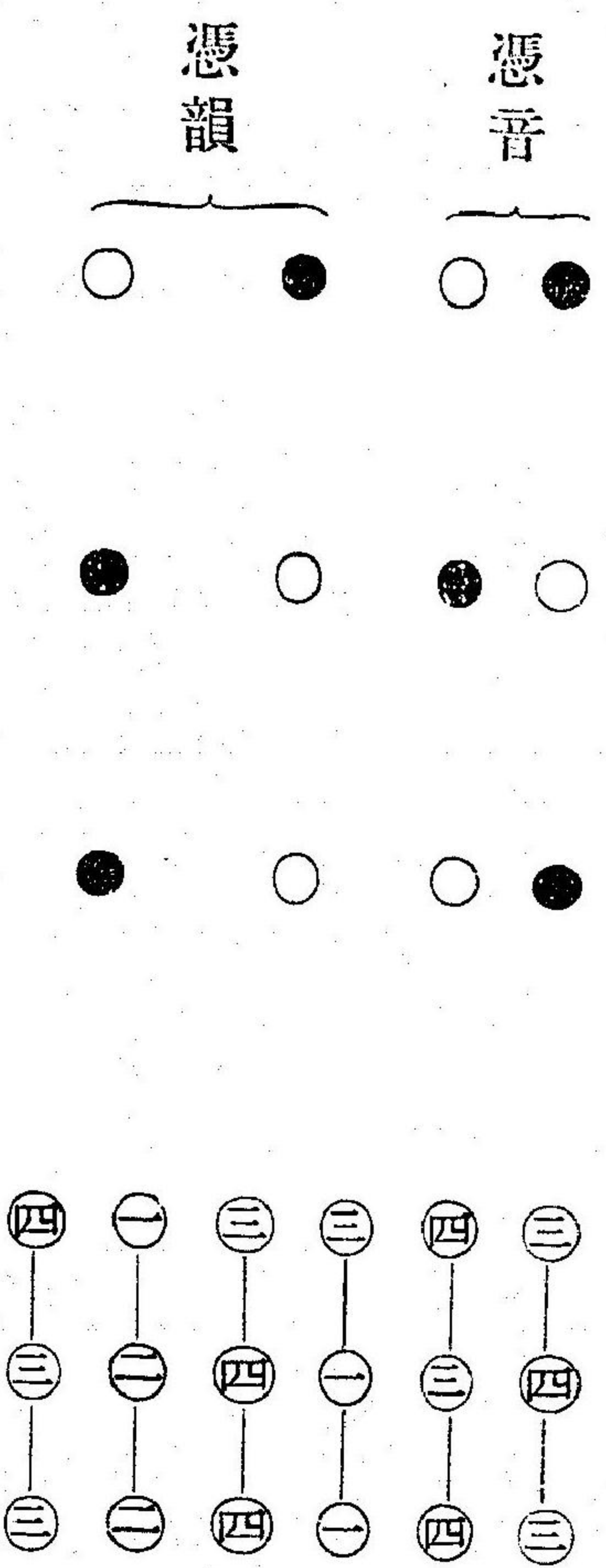
音和	㊦	㊧	㊨	㊩	㊪
	㊫	㊬	㊭	㊮	㊯
	㊰	㊱	㊲	㊳	㊴
	正				
偏	息	力	所	德	
杯	晋	鍾	間	紅	
切	切	切	切	切	
杯	信	龍	山	東	

本來準音和は憑韻なり。舊來慣用の三同音和の稱呼に従ひ、此類の憑韻を音和の方に移したるなり。一四共通、二三共通の字母な

憑韻				憑音				準		
三	四	三	一	四	三	三	二	一	二	三
四	三	一	二	三	四	二	三	四	三	二
四	三	一	二	四	三	三	二	四	三	二
居	予	牛	古	息	旨	彼	側	他	山	直
盈	救	昆	諧	弓	夷	側	侍	前	員	教
切	切	切	切	切	切	切	切	切	切	切
輕	宥	暉	皆	嵩	脂	逼	蓄	天	栓	棹

るを以て、此の如き音和法を許すと雖も、一と四と又二と三との間に、其音に聊か區別あるたるべきは、已に説きたるが如し、憑音 ④③④の位置に①③①、又③④③の位置に①④①、憑韻①③①の位置に④①④、④③④の位置に①③①、又③④③の位置に①④①の位置に④①④の位置に④④④の位置に②④②を用ゐること稀なるは、此區別ありたるに由ることなるべし。今○を以て直聲●を以て拗聲を表はし、音字、韻字、歸字、直抛の關係を示すべし。但し二等、三等、兩拗聲の間に生ずる所の憑音は、他と類を異にす。





音字韻字共に直聲なれば、歸字は必ず直聲なるべく、音字韻字共に拗聲なれば、歸字は必ず拗聲なるべきこと、自然の法則なり。音圖の中、此法則に協はざる者あれば其は廣韻と韻鏡と一致せざる所あるか、或は反切に精確ならざる所あるか、兩者の一を示せるなり。一等二等若しくは三等四等の間に生ずる所の憑音憑韻は、直聲の拗聲に移り、或は拗聲の直聲に變らんとして自然に起り來る音聲變化にして、全く音和の變形なり。因りて古音の反切

は、音和の外に出てざるを知るべし。憑音と憑韻とは、其別何處にありや、歸字に現はれたる所の結果、其聲に大差なきが如し。羅馬字を以て反切の説明を試みんとするに當り、宜しく左の諸項に注意すべし。

一、反切の結果として、二等三等の拗韻の前に、舌上音、正齒音又半齒音の來るとき、yの落つるを常とす。長の音^t+yang、の^{tang}、逐の音^d+yuk、の^{duk}、初の音^{ts}+yo、の^{ts'o}、少の音^s+yén、の^{sen}、任の音^j+yim、の^{jin}となるが如し。唇、牙、喉、半舌の拗音の來るときも亦同じ。表の音^{py}+yén、の^{pyén}、言の音^{ney}+yén、の^{neyén}、香の音^{hy}+yang、の^{hyang}、龍の音^{ly}+yong、の^{lyong}となるが如し。

二、唇音と半舌音とは、更に再び其後に連なるyを落とすことあり。邦の音^{pyang}、の^{pang}、麻の音^{mya}、の^{ma}、風の音^{fyung}、の^{fung}、縛の音^{vyak}、の^{vak}、獵の音^{lyep}、の^{lep}となるが如し。

三、合轉の輕唇音は、wの落つるを常とす。蕃の音 *fwyén* の fan, 文の音 *hwyn* の *mun* となるが如し。此格 w と y の落つるに従ひ、母韻に變化を生じ、*fwyén* は fan, fon, fén となり、*hwyn* は *hunn, hon, hán* となる。

四、合轉の牙喉兩音の下にある二等韻は、yの落つることあり。關の音 *kwyan* の *kwán*, 花の音 *hwya* の *hwa* となるが如し。三等韻にも亦同様の例ありて、時には漢吳兩音を比して、其原音を窺ひ得べき者あり。獲の字の如きは、漢音キヤク(*kyak*)にしてw略、吳音クワク(*kwak*)にしてy略なり。以てクヤク(*kyak*)の原音ありたるを知るべし。

五、字母の形式を整ふるため、影母は i、匣母は y を以て表はせど、兩者無聲に均しきが故、之を略して母韻のみ記するも妨なし。阿の音 *ai* を *ai*, 烟の音 *ai* を *ai*, 謳の音 *ou* を *ou*, 一の音 *it* を *it*,

寒の音 *ian* を *ian*, 賢の音 *ien* を *ien*, 紅の音 *iong* を *iong* と記するが如し。

六、喻母は y を以て表はし、拗聲の標記にも亦 y を用ゐるが故、其區別に注意すべし。影母匣母を略したる場合に、拗聲に接するときは、i、y の位置に () を用ゐて、喻母と分つを宜しとす。衣の音 *ai* を () *ai*、下の音 *ia* を () *ia* と記するが如し。匣母は尤も出氣の符號のみにて差支なかるべし、即ち下を *ai* と記するが如し。

七、喻母の y は合轉にて、三等韻の前に来るとき、我音にては拗聲の y と共に、屢落つることあり。雨の音 *ywin* を *yu* (官話 *yu*)、雲の音 *ywin* を *wun* (官話 *yun*)、榮の音 *yweng* を *weng* (官話 *yung*)、越の音 *ywet* を *wet* (官話 *yneh*) と呼ぶが如し。

八、第十二轉の模虞の韻は、輕微なる合口音なるが故、都、吾、蘇等を

開口音の如く *fo, ngo, ɔ* 等と記せど、嚴密なる記法より言へば、*twɔ, ngwɔ, swɔ* 等なるべきを記憶し置くべし。第一轉の東の韻も合口音なれど、至つて輕微なるか故、之には *w* を用ゐることなく、翁を *iong*、屋を *iok*、融を *yung*、育を *yuk* と記す。

九、第二十七、第二十八兩轉の歌戈の韻は韻鏡にては *ɔ* なれど、廣韻の反切にては、之を *á* に改む。第二十九、第三十兩轉の麻の韻の三等四等は、韻鏡にては *é* なれど、之を *á* に改む。第三十一、第三十二兩轉の唐陽の韻は韻鏡にては *ong* なれど、廣韻の反切にては *ang* と爲す。

十、歸字の開合は音字、韻字の何れを標準として定むべきか、常に起り來る所の問題なり。

黃	<i>iw(áng)</i>	練	<i>(l)én</i>	切	縣	<i>iwén</i>
永	<i>ywy(eng)</i>	兵	<i>(p)yeng</i>	切	榮	<i>ywyeng</i>

此二例、*w* は明かに音字の方にあり。

多	<i>t(ɔ)</i>	官	<i>(k)wán</i>	切	端	<i>twán</i>
五	<i>ng(ɔ)</i>	會	<i>(i)wái</i>	切	外	<i>ngwái</i>

此二例、*w* は明かに韻字の方にあり。

歸字影喻兩母の音に屬するとき、この開合の別は、假名遣に關係する所甚だ多きが故、聊か説明を試むべし。本居氏は字音假字用格に於いて、契中が反切の上の字を以て開合を分つべしと唱へしを、不用意の言と爲して斥け、強ひて反切を以て分たんとせば、韻字に由るべしと言はれたれど、是も亦用意未だ周到ならざる言なるべし。開合は音字に依る者あり、又韻字に依る者ありて、此間に別に一定の法無きが如し。音字に依る場合には、韻字の開合は與らず、又韻字に由る場合には、音字の開合は與らざるなり。概して言へば音字に依る者に比すれば、韻字

に依る例其數遙かに多し。

韻字に依る例は影母所屬の字に多し。

鳥 i(wo) 侯 (i)ou 切 謳 ion

合音のwは音字の韻の方に屬して、反切に關係を及ぼさず。歸字は韻字に従ひて、ionとなるが故に、音字鳥は合口のヲの假名なれど、歸字謳は開口のオの假名となる。鳥謳は影母に屬す。

於 i(y)o) 袁 (y)wyeŋ 切 鴛 iwyeŋ

於是開口、袁は合口の聲なり。反切の結果、歸字鴛は iwyeŋ となる。故に於是オの假名なれど、鴛はエヌの假名なり。於鴛は影母に屬す。

哀 i(i) 都 (t)wo 切 烏 iwo

哀は開口、都は合口の聲なり。歸字烏は韻字に従ひて、合口の聲となり、其假名はヲなり。哀烏は影母に屬す。

乙 i(y)it) 肱 (k)wong 切 泓 iwong

乙は開口、肱は合口の聲なり。音字は拗聲なれども憑韻にして關係する所なく、歸字は韻字に従ひて合口の直聲となりて其假名はヲなり。乙泓は影母に屬す。

于 y(wy)u) 紀 (k)yi 切 矣 yi

音字の合口音なるに拘はらず、歸字は音字に従ひて、開口音となり、其假名はイなり。于矣は喻母に屬す。

羊 y(ang) 倫 (l)wvin 切 勻 ywvin

音字は開口音なれど、歸字は韻字に従ひ、拗聲の憑韻にして、合口音なり。勻の假名はキヌなり。羊勻は喻母に屬す。

于 ywy(i) 敏 (m)vin 切 殞 ywvin

雨 ywy(u) 方 (f)yang 切 王 ywyang

遠 ywy(én)

支 (si)

切 爲 ywyi

永 ywy(eng)

兵 (p)yeng

切 榮 ywyeng

右は皆音字合、韻字開、歸字合の例なり。故に歸字はキヌ、ワウ、キ、エイの假名なり。音字歸字共に喻母に屬す。

烏 iw(o)

猛 (m)yang

切 營 iwyang

歸字の音字の合に従ふこと前例に同じ。iwyangはwangの略音と爲り、其假名はワウと爲る。烏營は影母に屬す。

以上の諸例より推して考ふるに、開合は音字に依るべきか、韻字に依るべきか、昔は音韻の調和に由りて、自然に定まりたるものなるべきが、後世の人の作りたる法則を以て、之を説き難し。故に反切の音字韻字を以て、我假名遣を決する標準と爲すことの、不適當なるを悟るべし。かゝる問題は、宜しく韻鏡の開合に由りて、決すべきなり。

終りに廣韻と韻鏡と、開合相一致せざる例を擧げて、聊か説明を試むべし。従來の反切門法にては、此類を開合門或は憑韻門の中に置くことあり。

彼 py(i)

爲 (yw)yi

切 陂 pyi

步 b(o)

光 (kw)yang

切 傍 bang

兵 py(eng)

永 (yw)yeng

切 丙 pyeng

右の三例、韻字爲光永は合轉に屬し、之に従へば歸字陂傍丙はpyi, bwáng, pwyengと爲るべき格なり。然るに陂傍丙は開轉に屬して、其聲前記の如し。音字彼歩兵は唇音なり。元來唇音は、一旦口を結びて、而して後に發する音なれば、能く合口音の韻と、自然の調和を保つと雖も、反切の結果、かゝる場合には、必ずしも歸字をして、韻字のみに由らしむべからず。音韻の反切、開口音に歸することあるも、敢て深く怪しむに足らず。後世の韻圖此

類の字を合と爲し、磨光韻鏡及び其他の數本亦之を開轉より合轉に移したるは、反切に重きを置くに過ぎて、是がために誤られたるものなるべし。

於 *iy(o)* 避 *(b)i* 切 恚 *ivi*
居 *ky(o)* 縛 *(b)yk* 切 獲 *kyak*

右は前例と相反し、反切の音字韻字共に開にして、歸字は合なり。これ韻字の唇音に導かれて、音韻相摩するとき、其餘勢を歸字の方に移したるものと見做すことを得べし。

虎 *h(o)* 伯 *(p)yk* 切 着 *hwak*
胡 *h(o)* 麥 *(m)yk* 切 獲 *hwak*

伯麥は唇音なるに由り、着獲の合なるを、前同様にして説明し得べし。或は虎胡は合なるに由り、wを添へて、*hw(o)*、*hw(o)*と爲し、歸字は音字の合に従ひたるものと見做すも可なり。

莫 *m(ak)* 早 *(i)an* 切 滿 *mvan*
謨 *m(o)* 晏 *(i)an* 切 慢 *mvan*

右は音字の唇音に導かれて、歸字の合と爲りたる例なり。尤も謨を *mwo*と爲せば、慢の方は、別様の説明を與ふことを得べし。

下 *iy(a)* 没 *(m)wot* 切 斲 *iwot*

没は合轉に屬する字なり。他の例と異なり、此唇音は開口の聲を導き出だして、歸字をして、合口音ならしめず。されど是は寧ろ異例にして、此の如き場合に接すること至つて稀なり。以上は唇音に關係ある者を取り出だし、其性質を考へ合はせ、自然の發音の法則を基として、説明を試みたるなり。他音にも同様の例ありとせば、之に對して、亦相當の説明法あるべきこと疑ふべからず。

總じて開合の問題は、反切のみに由りて決し難し、古音の反切は自然の法則より出でたるものなるを、後世の人の製作せる韻圖に據りて之を検すれば、甚だ不自然なる法則を設けて、説明せざるを得ず。且つ古音を離るゝこと愈々遠ければ、之に對する反切法、愈々相協はざること多きに至るべし。晚唐初宋の頃の、字音の開合は、反切に由らずして、直ちに韻鏡に由りて、判断を下すこと最も捷徑なるべし。

磨光韻鏡の翻切伐柯篇の末尾に、廣韻、韻會等に載する所の反切常用の字を聚めて、之を類別せり。今其類聚を借用して、更に表を作り、七音三十六字母を列ねて、其下に音字を記し、又韻鏡四十三轉排列の順序に従ひて、二百六韻を配置し、平上去入の韻の下に韻字を擧ぐ、音字の下の數字は、轉數と等位とを示し、韻字の下の數字は、等位のみを示す。

音字表

唇音 幫^三 通^三 哺^三 補^三 布^三 博^三 北^四 拜^四 巴^二 百^三 弊^三 陂^三 彼^四 悲^六 鄙^六
 筆^一 兵^三 貶^三 卑^四 俾^四 比^六 賓^一 必^一 畢^一 邊^三 徧^三 璧^三 滂^三 撲^一
 鋪^三 普^三 攀^二 拍^三 披^三 丕^六 譬^四 紕^六 匹^一 篇^二 片^三 僻^三 並^三
 蒲^三 菩^三 部^一 裴^一 傍^三 薄^三 白^三 皮^三 被^四 貧^一 弼^一 平^三 脾^四 婢^四 鼻^六
 頻^一 明^三 模^三 忙^三 莫^三 母^三 墨^四 老^三 靡^四 眉^六 美^六 旻^一 鳴^三 矛^三
 彌^四 弭^四 民^一 綿^二 名^三 覓^三
 非^一 封^二 匪^一 甫^三 府^三 分^三 弗^三 方^三 放^三 敷^三 峯^二 妃^二 斐^一 孚^二 撫^二
 拂^二 芳^三 奉^三 馮^一 伏^一 符^一 扶^三 附^三 房^三 防^三 縛^三 浮^三 微^一 無^一 巫^一 武^一
 文^一 勿^一 匚^一 囙^一

舌音 端^一 東^一 冬^二 都^二 覩^二 多^二 當^三 德^四 得^四 底^一 底^一 典^三 丁^三 透^三 通^一
 土^二 吐^二 台^三 坦^三 闔^三 叨^五 他^七 湯^一 儻^一 託^三 天^二 汀^四 遯^三 惕^三 定^三 同^一

徒杜度_二待_三大_{一五}達_三陀_{二七}堂唐_{三一}地_{四六}田_三敵_{三五}特_{四二}泥_{一三}

奴_{一三}乃_{一三}內_{一四}那_{二七}諾_{三一}呢_{一七}年_{二二}裏_{二五}寧_{三五}

知_{三四}中竹_一追_七豬_二株柱_二珍_{一七}展_三張_{三一}陟_{四二}徹_{三三}惹_三蓄_{三一}

擣_四癡恥_八楮_二抽丑_{三七}救_{四二}澄_{四二}瑒宅_{三三}港_{三九}逐_{三一}馳_四墜_七

治遲持_八除佇_二廚柱_二陳_{一七}傳_{二四}長丈杖_三直_{四二}孃_{三一}嬾_{一五}

拏_{二九}穰_三尼_六女_二暱_{一七}匿_{四二}

牙音 見_二公_一孤古_一骨_{一八}過_{二八}各_{三一}郭_{三二}佳_{一五}賈_{二九}恭_三詭_五紀_八

居舉_二俱_二君_{三〇}嬌_{二五}姜_{三一}九_{三七}規_{四五}吉_{一七}均_{一八}涓訣_{二四}頸_{三三}經

激_{三五}肩_{三六}溪_{一三}空孔_一酷_二枯苦_二渴_三闊_{二四}可_{二七}康恪_{三一}口_{三七}

皆克_{四二}楷_{一三}曲_二綺_四虧_五起_八豈_九祛墟去_二區驅_二困_{一八}乞_{一九}

羌_{三一}鄉_{三三}丘_{三七}欽_{三八}怯_{四〇}企_四窺_五弄_六詰_{一七}缺_{二二}牽_{二二}犬_{二四}傾_{三四}

謙_{三九}羣_{三〇}跪_五其暨_八渠巨_一衢具_二竭_二強_{三一}狂_{三二}求_{三七}琴_{三八}

極_{四二}揆_{四七}疑_{三八}吾五_一斲_{一三}俄_{二七}鄂_{三一}玉_{三二}擬_八魚語_一虞愚虞_二

伧_{一九}元_二逆_{三三}牛_{三七}宜_{四四}倪_{一三}研_{二二}

齒音 精_{三三}祖_一臧作_{三一}則_{四二}資姊_{四六}醉_七茲子_八津_{一七}遵_{一八}箋節_{二二}將

蔣_三借_{三二}卽_{四二}清_{三三}麤_一采_三倉蒼_三雌此_{四四}取娶趣_{十二}親七_{一七}

淺_二千_三青戚_{三五}從_{四二}徂粗_二才在_三藏昨_{三一}自_{四六}慈_八秦疾_{一七}

前_三樵_{二六}牆匠_{三一}情_{三三}心_{三八}蘇素_一損_{一八}鎖_{二八}桑_{三一}斯_{四四}私_六雖_七

思司_八胥_二須_二辛悉_{一七}宣_三先_三蕭_{二五}寫_{二九}相想_{三一}錫_{三五}織_{四〇}

息_{四二}邪_{四九}隨_五詞辭似寺_八徐_二旬_{一八}旋_三詳祥_{三一}夕_{三三}尋習_{三八}

照_{三五}菹阻_二芻_三札_三莊壯_{三一}爭諍_{三五}鄒_{三七}側仄_{四二}支_{四四}旨脂_六

之止_八諸煮_二質_{一七}章_{三一}征正_{三五}占_{三九}職_{四二}穿_{四四}初楚_{一一}察_{二二}

又_{二九}瘡創_{三一}測_{四二}充_{三一}處_一樞_二叱_{一七}川_{二四}昌_{三一}尺赤_{三五}牀_{三二}稟_一

士仕_八鋤助_二雛_三豺_三查_{二九}岑_{三八}崩_{四二}示_{三六}神實_{一七}乘食_{四一}

審_{三八}雙朔_三師_六疎所疏_二數_三山_三殺_三沙_{二九}生_{三三}色_{四二}施_{四三}

尸矢_六詩始試_八書舒_二輸_三設_三商傷賞_{三一}釋_{三五}識式_{四二}禪_{三三}

蜀^二氏是^四 視^六 時市^八 署^二 殊豎^三 辰臣^{一七} 常嘗上^三 成^{三五} 承
丞寔植殖^{四二}

喉音

影^{三三} 烏^鄔 哀^愛 安^遏 阿^{二七} 握^三 委^{三五} 於^二 乙^{一七} 謁^二 央^三
憂^{三七} 挹^{三八} 憶^{四二} 伊^{四六} 鷺^{三一} 一^{一七} 煙^{二三} 么^{二五} 益^{三三} 曉^{四五} 呼^虎 海^{一三}
忽^{一八} 呵^{二七} 火^{一八} 荒^霍 狹^陝 黑^{四二} 孝^{二五} 花^{三〇} 赫^{三三} 喜^{三八} 虛^許
訐^詭 迄^{一九} 香^三 况^三 閱^三 休^朽 興^{四二} 墮^{四五} 黝^三 馨^{三五} 匣^{四〇} 胡^二
戶^二 曷^三 何^{二七} 黃^三 侯^{三七} 懷^{二四} 轄^二 下^{二九} 獲^{三六} 兮^{一三} 弦^{三三} 玄^{二四}
刑^{三五} 喻^{四二} 爲^{三五} 洧^七 韋^{一〇} 于^羽 雨^二 筠^{一八} 雲^云 遠^越 王^{三三}
永^{三四} 尤^有 域^{四三} 容^欲 移^四 夷^六 以^八 余^餘 與^予 庾^兪
曳^{一五} 貪^逸 勻^尹 悅^三 衣^{二九} 羊^{三一} 營^{三四} 弋^翼

半舌音

來^{一三} 盧^魯 賴^{一五} 郎^落 洛^{三一} 縷^{三七} 勒^{四二} 離^四 利^六 里^理 呂^旅
倫^{一八} 良^三 令^{三五} 力^{四二} 憐^練 歷^{三五}

半齒音

日^{一七} 兒^四 樂^七 而^耳 如^汝 儒^濡 乳^二 人^{一七} 入^{三八} 仍^{四二}

韻字表

第一 東^一 蒙^公 空^紅 籠^一 中^弓 宮^終 隆^戎 董^一 蠓^動 孔^總 翁^送 凍^一
漚^貢 弄^一 鳳^中 衆^三 屋^一 卜^木 谷^祿 福^竹 菊^宿 六^三
第二 冬^一 攻^宗 鍾^三 封^恭 凶^龍 容^庸 腫^三 奉^冢 重^拱 腫^隴 壘^尤
竦^勇 宋^一 統^綜 用^四 頌^沃 篤^督 毒^酷 燭^三 曲^玉 蜀^錄 足^欲
第三 江^二 雙^講 燭^項 絳^二 巷^覺 角^岳
第四 支^三 皮^糜 糜^羈 奇^宜 離^三 界^移 紙^三 彼^多 綺^氏 是^倚 爾^三 婢^弭
此^四 寘^三 智^寄 義^豉 避^企 賜^易
第五 支^三 媯^危 吹^垂 爲^三 規^隨 紙^三 詭^捶 委^毀 累^榮 背^髓 寘^三
僞^睡 瑞^累 志^四
第六 脂^三 悲^眉 尼^飢 肌^疔 咨^資 私^夷 旨^三 鄙^美 雉^几 視^履 姊^四
至^三 祕^備 媚^冀 器^利 寐^四 異^四

第七 脂 追龜遠佳^三 雖惟遺維^四 旨 軌水洧鮪誅^三 癸^四 至 媿

位類^三 季恠醉萃遂^四

第八 之^三 淄緇^二 持其^三 茲^四 止^三 士仕史^二 紀已起齒市里耳^三 似^四

志^三 置記吏^三 異^四

第九 微 依衣希^三 尾 幾豈豨^三 未 既氣豸^三 廢 又^三

第十 微^三 非歸韋 尾^三 匪斐鬼偉 未^三 味沸貴畏胃謂 廢^三 肺吹穢

第十一 魚^三 蒞^二 居諸於虛^三 余^四 語^三 阻^二 舉巨渚許呂^三 序與^四

御^三 助^二 倨居去署慮沕茹^三 恕豫預^四

第十二 模^一 晡都徒孤姑吾吳租徂蘇烏胡乎 虞^三 芻^二 夫無俱隅朱

誅輸于^三 逾^四 姥^一 補土古五戶魯 廢^三 甫父武矩主羽^三 庾^四

暮^一 故誤祚路 遇^三 具句注戍屢

第十三 哈^一 開哉才哀來 皆^二 埋諧 齊^四 批迷低題雞稽西兮奚黎

海^一 乃改宰亥 駭^二 楷 齊^四 米弟啓禮 代^一 戴耐漑慨愛 怪 玻

介界療^二 祭 灑 瀾 瀾 懋 制 世 勢 例^三 霽^四 閉 計 詣 央 犛 喝^二

第十四 灰^一 杯 栝 恢 回 皆 垂 懷 淮^二 齊 圭 携 哇^四 賄^一 每 罪 猥 僭

隊^一 妹 對 內 潰 績 怪^二 拜 壞 祭 衛 芮^三 霽 桂 惠^四 夬^二 邁 快

話

第十五 佳^二 街 暎 蟹^二 買 泰^一 貝 加 大 蓋 槩 艾 卦 賣 懈 解 隘^二 祭^四

蔽 袂

第十六 佳 媯 媯 蛙^二 蟹 丁 夥^二 泰^一 外 最 會 卦^二 祭 歲 銳^四

第十七 痕^一 根 恩 臻^二 誥 眞^三 珍 巾 銀 鄰 人^三 賓 秦 辛^四 狠^一 懇 軫^三

敏 紉 吞 忍^三 盡 引^四 恨^一 良 震^三 陳 僅 覲 振 遴 刃 仅^三 晉 進 印^四

沒 紇^一 櫛^二 瑟 質^三 筆 密 乙 栗 日^三 必 畢 吉 七 悉^一 四

第十八 魂^一 奔 昆 倕 尊 渾 諄^三 述 均 唇 贊 筠 倫 綸^三 遵 旬 勻^四 混^一 本

袞 付 損 準^二 殞^三 尹 允^四 恩^一 悶 困 寸 稔^三 順 閏^三 峻 浚^四 沒^一

勃 骨 忽 術^三 述 律^三 橘 郵 聿^四

第十九 欣^三斤^三隱^三謹^三焮^三斬^三近^三迄^三訖^三乞

第二十 文^三分^三雲^三云^三吻^三紛^三蘊^三問^三運^三物^三弗^三拂^三勿

第二十一 山^二閑^二間^二元^二言^二軒^二仙^四延^二筵^二產^二簡^二限^二阮^二堰^二偃^三臆^三

獮^四緬^四剪^四淺^四演^四欄^二間^二莧^二願^二建^二堰^三憲^三線^四面^四箭^四賤^二鏹^二瞎^二月

許^四竭^四謁^三歇^三薛^四

第二十二 山^二鰥^二頑^二元^三煩^二袁^二仙^二全^二泉^二宣^二沿^四緣^四阮^三反^二晚^二遠

獮^四兖^四禰^四幻^二願^三販^二萬^二怨^二線^二絹^四掾^四鏹^二頰^二刮^二月^三

發^二伐^二厥^二越^二薛^二絕^二雪^二悅^四

第二十三 寒^一干^一安^二刪^二姦^二顏^二仙^二乾^二虔^二焉^二連^三然^三先^四眠^二天^二顛^二田^二年

堅^二前^二千^二煙^二玄^二賢^二早^一但^一笱^二潛^二赧^二獮^二辨^二免^二展^二蹇^二善^二扒^二輦^二銑^四典

珍^二峴^二翰^一旦^一肝^一贊^一按^二諫^二雁^二晏^二澗^二線^二輾^二戰^二扇^二膳^三霰^四麵^二電^二甸

佃^二見^二練^二曷^一達^一割^一葛^二黠^二曼^二薛^二別^二傑^二列^二熱^二熱^三屑^四蔑^二結

第二十四 桓^二潘^二官^二丸^二刪^二班^二關^二還^二仙^二權^二專^二川^二員^二圓^二攣^三先^二玄^四

緩^一伴^二滿^二短^二管^二潛^二板^二撰^二縮^二獮^二轉^二篆^二卷^二軟^二腴^三銑^二吠^二汝^四

換^一半^一幔^一段^一貫^一玩^一算^一喚^一亂^一諫^二慣^二患^二線^二變^二轉^二轉^二眷^二卷^二絹^二倦^二戀^三

霰^二縣^四眩^四末^一撥^一發^一撥^一括^一黠^二八^二拔^二滑^二滑^二薛^二輟^二蹶^二劣^三屑^二

決^二抉^二穴^四

第二十五 豪^一褒^一袍^一毛^一刀^一高^一曹^一遭^一勞^一肴^二茅^二嘲^二交^二爻^二宵^二鏹^二驕^二喬^二昭

招^二祆^二囂^三蕭^四彫^二凋^二條^二堯^二么^二聊^二皓^一保^一抱^一道^一皓^一早^一浩^一老^一巧^二飽^二卯

絞^一爪^一小^一表^一兆^一矯^一沼^一少^一紹^一夭^三篠^四鳥^二皎^二晶^二了^二號^一報^一到^一倒^一導^一耗

效^二貌^二教^二稍^二孝^二笑^二廟^二召^二嶠^二照^二少^三嘯^四弔^四叫

第二十六 宵^四焦^二消^二霄^二邀^二遙^二小^四笑^四妙^二肖^二要

第二十七 歌^一俄^一何^一哿^一可^一我^一箇^一佐^一邏

第二十八 戈^一波^一婆^一和^一禾^一靴^二果^一火^一過^一臥^一貨^一和

第二十九 麻^二巴^二加^二牙^二霞^二迦^二茄^二伽^二遮^二車^二奢^三賒^三嗟^四邪^四馬^二賈^二雅^二者

下^二者^三姐^二野^二也^四冶^四禡^二霸^二罵^二駕^二架^二稼^二嫁^二訝^二亞^二謝^二夜^四

第三十麻 瓜華^二 馬^一 寡瓦^二 禡^一 化^二

第三十一唐 旁剛岡當郎^{陽^四} 莊^二 方房張章殃良^三 羊^四 蕩^一 黨^一

朗^{養^四} 爽^二 昉丈掌兩^三 獎^四 宕^一 謗浪^{漾^四} 放訪妄向亮讓^三

鐸^一 博各鶴落洛^{藥^三} 縛虐灼約略若^三 爵雀^四

第三十二唐 光黃^一 陽^一 王^三 蕩^一 廣晃^一 養^一 往^三 宕^一 曠^一 樣^一

況旺^三 鐸^一 郭鏤^一 藥^一 獲獲^三

第三十三庚 盲行^{清^四} 兵明京驚鄉^三 情盈^四 梗^二 猛杏^{靜^四} 丙景

影^三 打井郢^四 諍^一 孟更^二 敬^三 病命慶映^{勁^四} 姓^{陌^三} 伯白格

額昔^四 碧戟卻劇逆^三 辟積迹益易亦^四

第三十四庚 觥橫^二 清^一 榮^三 營^四 梗^一 礦營^二 靜^一 環憬永^三 頃^一

永^四 諍^一 橫^二 敬^一 詠^三 勁^一 窳^四 陌^一 號^二 昔^一 役^四

第三十五耕 萌莖清^一 貞征成^三 青^四 丁經刑靈^{耿^二} 幸^一 靜^一 整領

嶺^三 迥^一 茗頂鼎挺到醒淬^四 諍^二 迸^一 勁^一 鄭政正^三 徑^四 稟定

佞麥^二 摘革責厄核^{昔^一} 隻炙石^三 錫^四 覓狄激擊檄歷

第三十六耕 宏^一 青^一 肩熒螢^四 迥^四 徑^一 綱^四 麥^一 擱獲^一 錫^一

吳鷓閱^四

第三十七侯 鈞溝婁^{尤^三} 謀浮鳩求周州流留^三 休秋由猷^四 幽^四

彪蚪厚^一 斗苟句垢口^{有^三} 否肘久九柳^三 酒酉^四 黝^四 糾^一 紉

候^一 逗豆遯奏漏^{宥^三} 富副救咒又祐溜^三 僦就^四 幼^四 謬

第三十八侵 簪岑^二 金吟斟針深音林^三 心尋淫^四 寢^四 瘁^二 蹠朕

錦枕甚甚飲廩桂稔衽^三 沁^四 譖^二 鳩禁蔭廕任^三 浸^四 緝^四 急

汲及執汁立入^三

第三十九覃 南男含^{咸^二} 讒^一 鹽^一 占炎庵廉^三 添^四 兼甜^{感^一} 禪庵

賺^二 滅斬琰^一 檢剡奄險冉染^三 忝^四 玷筭^一 勘^一 紺暗閻^{陷^二} 賺

額^一 窆驗贍^三 榛^四 店念^{合^一} 答沓閣襍^{洽^二} 囹夾^一 葉^一 輒涉

獵^三 帖^四 牒頰愜協

第四十 談一 廿三 酣 銜三 監 嚴三 鞅 杓 鹽四 敢一 覽 檻三 斃 嚴三 广 掩
 掩 琰四 漸 闕一 瞰 斬 覈 濫 鑑二 懣 齷三 豔四 盍一 臘 狎三 甲 業三
 劫 怯 葉四 攝 接

第四十一 凡三 芝 范三 犯 鍍 梵三 斐 劍 欠 汎 乏三 法

第四十二 登一 崩 滕 增 會 恒 稜 蒸三 冰 澄 殍 矜 兢 升 承 膺 興 陵 仍 等一
 肯 拯三 慶 殊 嶝一 鄧 亘 證三 應 饒三 甌 孕四 德一 北 墨 得 刻 則 黑
 勒 職三 側二 逼 極 織 億 力三 卽 翼四

第四十三 登 肱 弘一 德 國 或一 職 域三

明治四十五年六月拾壹日印刷
 明治四十五年六月拾五日發行

翻切要略
 定價金參拾錢

著 作 者 大 島 正 健

印 發 行 者 株 式 會 社 啓 成 社

代 表 者 遠 藤 國 次 郎

印 刷 所 株 式 秀 英 舍 工 場



發 賣 所

東京市日本橋區本銀町三ノ二

株 式 會 社 啓 成 社

振替口座東京一〇五五番

發 賣 所

東京市神田區裏神保町一

三 省 堂

振替口座東京一五九七番

大島正健先生著書

韻鏡音韻考

全一冊

定價
郵稅
金五拾錢
六

改訂韻鏡

全一冊

定價
郵稅
金五拾錢
六

翻切要略

全一冊

定價
郵稅
金參拾錢
六

發賣所

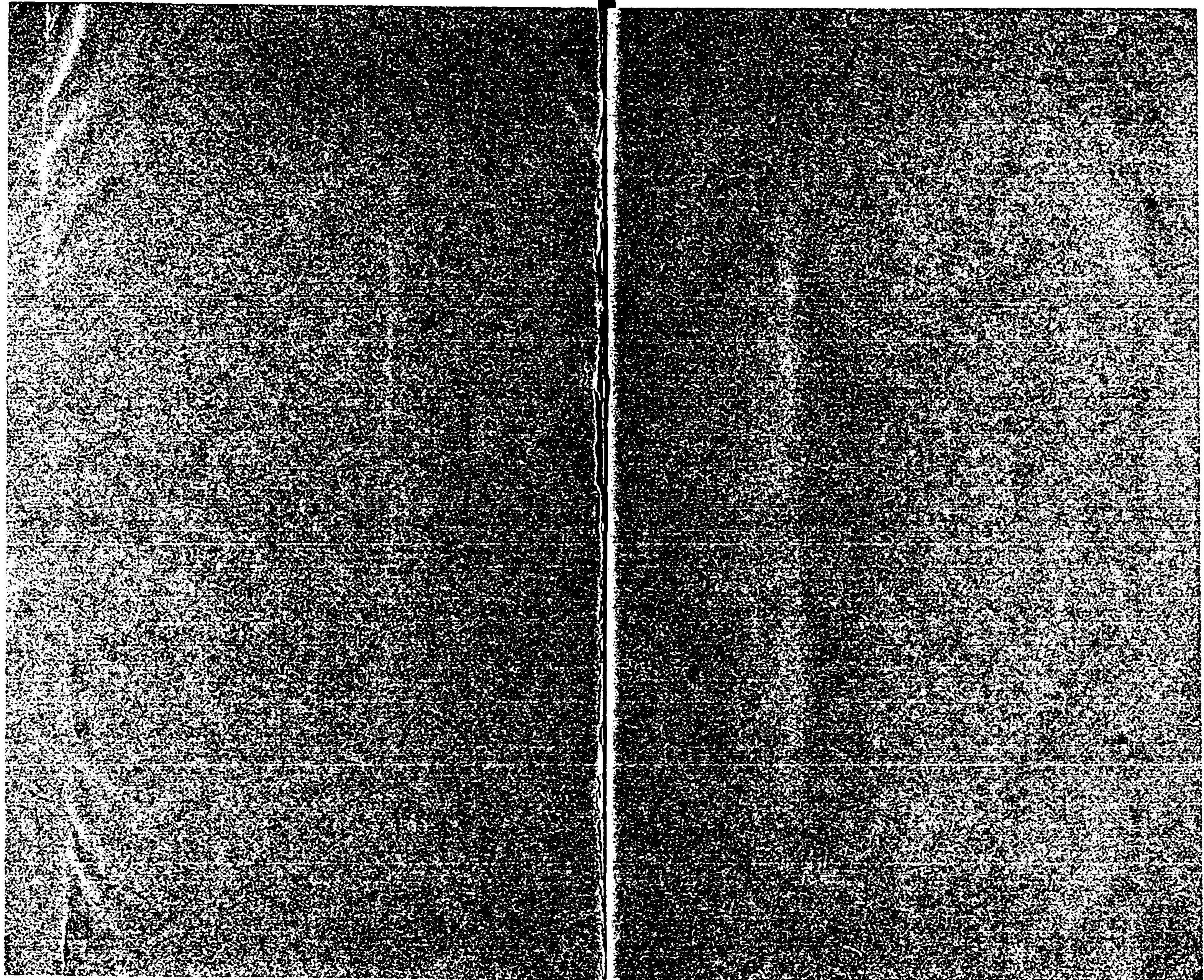
日本橋區本銀町三丁目二番地

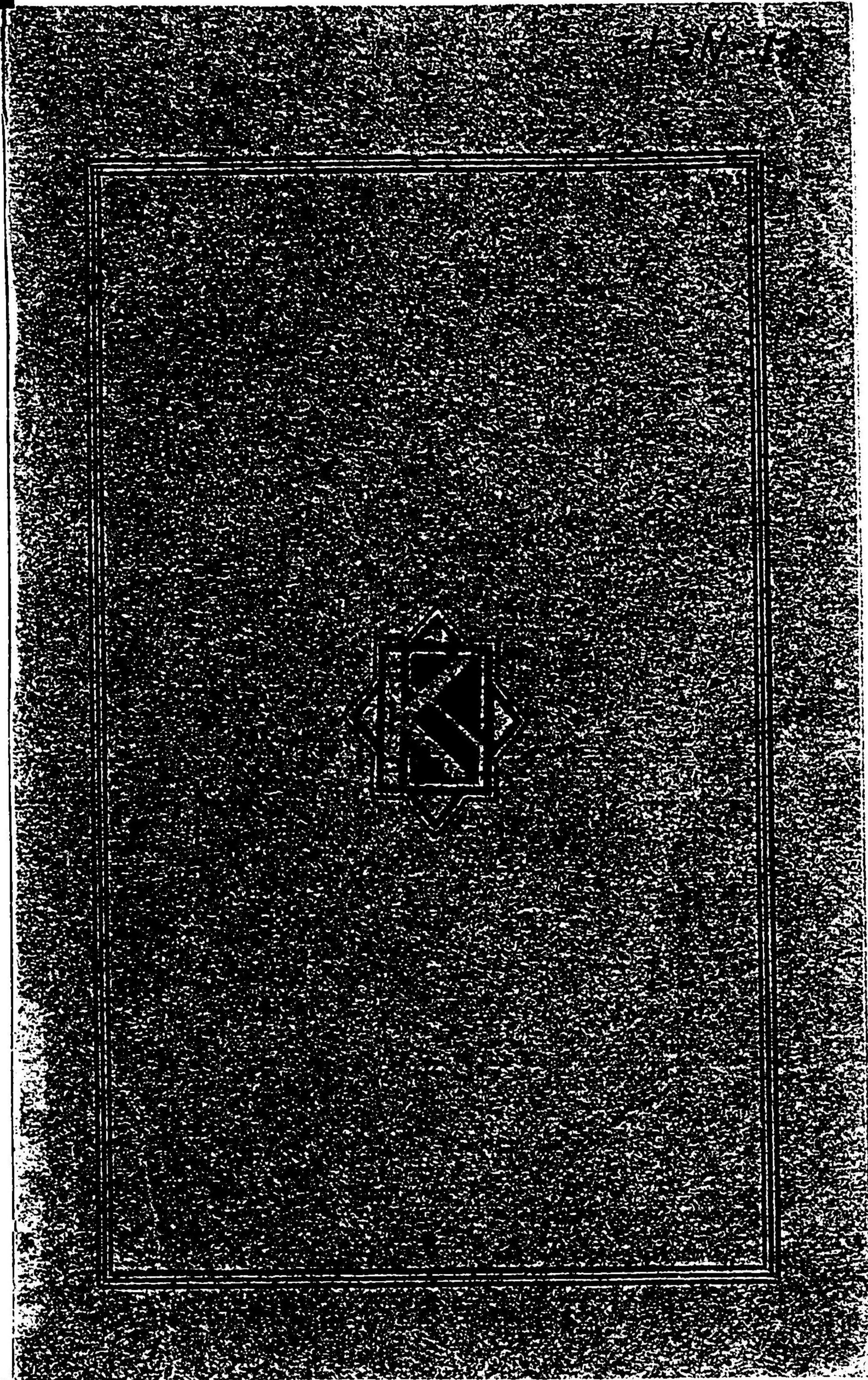
株式會社啓成社

發賣所

神田區裏神保町一番地

三省堂





1

翻切要略

国立国会図書館

811.1

0812h

077314-000-9

811.1-0812h

翻切要略

大島 正健/著

M45.6

DAC-0512

